

第 55 回大会を終えて

教育史学会第 55 回大会は、2011 年 10 月 1 日（土）・2 日（日）に京都大学で行われました。幸い秋晴れのお天気にも恵まれて、参加者総数は 350 名（うち一般会員 242 名、臨時会員 20 名、院生会員 46 名、院生臨時会員 42 名）にのびりました。

研究発表申込者は 65 名でした（うち 2 名は発表辞退）。名古屋大学における第 53 回大会以来のタイム・スケジュールを踏襲すると、個人発表は 1 日目午前 5 本、2 日目午前 4 本・午後 4 本、合計 13 本となりますので、5 会場でぎりぎり対応できる発表者数でした。ただし、会場ごとになるべく内容的な連関を図る必要もあるため、2 日目午後だけは全部で 6 会場とせざるをえませんでした。会場数を増やすと、当然、聞きたい発表が重複する可能性が高くなってしまいます。今後、研究発表の申込者数がさらに増えた時にどのように対応すべきか、検討を要する課題と感じました。

レジュメの配布方法も悩ましい問題でしたが、結果的にはここ数年の大会と同様に、発表直前に会場係がレジュメを配布する方式を採用しました。この方式ですと、「レジュメだけは欲しい」という要望に応えることが難しくなります。そこで、2 日目の夕方、大会事務局で保管していた余分のレジュメを「ご自由にお取りください」とするスペースを設けたところ、多くの人にご利用いただきました。今回は臨機応変の措置となりましたが、余ったレジュメの配布方法をあらかじめアナウンスをしておき、発表者にも多めにレジュメを用意しておいてもらえばよかったですのではないかと思います。

シンポジウムでは大学史研究と教育史研究の関係をテーマとしてとりあげ、263 名という多数の方にご来会いただきました。受付が一時混乱したり、文字通り立錫の余地のない状況で空調が思うように効かなくなったりとご不便もおかけしましたが、大盛況であったことに感謝いたします。さまざまな大学で年史編纂、自校史の教育などが進められる状況の中、自らの関係する大学の歴史について語る難しさ、「やばさ」にどのように向かい合うかという問題について、今後継続的に議論の場を設けていくべきだというご意見をいただきました。

懇親会の参加者数は 151 名（うち院生会員 35 名）でした。「日本酒がない！」といったご指摘もいただきましたが、京都ブライトン・ホテルの料理の味

は悪くないとご好評だったようでほっといたしました。

コロキウムは 5 企画が行われました。参加者数は正確には把握できておりませんが、遠方からお越しの方が多くにもかかわらず、夕方 6 時近くまで参加された方が 100 名以上はいらっしゃいました。

全体として、会場の位置関係のわかりにくさなど準備委員会としてはいろいろ不備もあったものの、白熱した議論がそれを十分に補ってくださったように感じています。

本大会では、二つの新しい試みをしました。

一つは、託児サービスの導入です。5 月に「大会開催のご案内」を郵送した際に、個人発表予定の会員から「託児サービスはないのか」という問い合わせがあり、近年では他の学会で実施している例も多いことも考えて、対応することとしました。院生が子どもの世話をするという選択肢もあるとは思いましたが、安全性を考慮して、保険にも加入している専門の託児業者に委託しました。利用者は 2 名で、1 名は発表者、1 名は司会者の方でした。利用者が予想よりも少なかったのは、初対面の方に子どもを預けることの難しさを示すものと感じました。ただし、「大会開催のご案内」送付の段階で託児サービスの告知をしておけば、「それならば私も発表してみようか…」と考える人もさらに現れたのではないかと思います。予算的な裏付けが必要な措置ではあるものの、子育てにかかわる労働と研究の両立ということがすぐれて「教育学的(?)」な課題であると考えれば、今後も検討されてもよいのではないかと思います。

もう一つの新しい試みは、プログラム発送時に「大会参加にかかわるアンケート」を同封したことです。結果的に、WEB での回答者が 60 名、メールが 6 名、Fax が 16 名、合計で 82 名でした。回答率は決して高いとはいえませんでした。自由記述の欄の要望なども参考になりました。

最後に、熱意をもって大会を支えてくださった準備委員会のみなさん、院生スタッフのみなさんに、この場を借りて心より感謝いたします。

第 55 回大会準備委員長
駒込 武（京都大学）

総 会 報 告

2011年10月1日午後1時から京都大学医学部芝蘭会館稲盛ホールにて、今年度の総会が開催された。総会では、まず辻本雅史代表理事からご挨拶をいただいた。議長団として、小山静子会員と小玉亮子会員が選出され、議事が進行された。審議事項は全案件が原案通り承認された。出席人数は117名。

【報告事項】

1. 第54回大会年度会務報告

事務局より以下の会務報告がなされた。

(1) 会員異動

年度当初会員数891名、年度中入会者数48名、退会者数39名。年度末会員数900名(9名増)。

(2) 第54回大会

2010年10月8日・9日、早稲田大学にて開催。参加者数は326名。

(3) 『会報』の発行

2010年11月25日および2011年5月25日に『会報』108号、109号を発行した。

(4) 機関誌編集委員会選挙の実施

2011年8月24日に公示、9月9日を投票締め切りとし、9月14日に開票をおこなった。結果は報告事項2。

(5) 『日本の教育史学』第54集の刊行

2011年10月1日付で発行した。発行部数1,200部。

(6) 理事会の開催

第1回 2010年10月10日 早稲田大学

報告事項：前期理事会からの引き継ぎ事項について

審議事項：事務局長の委嘱について／選挙管理委員の委嘱について

その他：奨励賞副賞について／国際交流担当理事について／財政対策／研究動向欄について

第2回 (東日本大震災のため、3月の理事会はメール回議方式で行い、6月に正式に開催となった。)

報告事項：事務局移転／編集経過／54回大会決算報告／55回大会準備状況／公開セミナー

審議事項：選挙管理委員の選出／書評委員の選出／理事の役割分担について／会費引下げによる黒字解消について／会費引下げによる黒字解消について／会計費目の変更

について／将来計画積立金の取り扱いについて／研究動向欄のあり方について／入会者・退会者の承認について

その他：寄贈本について

第3回 2011年9月30日 京都大学

報告事項：第55回大会の準備状況について／会務報告／機関誌編集委員会選挙結果等について／第54集編集委員会報告／書評委員会報告／研究奨励賞選考結果について

審議事項：第54回大会年度決算および監査報告について／第55回大会年度事業改革と予算について／会則、規程の改正について／退会者の承認／国際化の検討／研究動向欄に代わる企画について

その他：第56回大会校について／研究奨励賞授与式の実施について／総会運営について

2. 機関誌編集委員会選挙の実施

以下の選挙結果(書評委員会については選出結果)が報告された。

〈2011年9月14日開票〉

■第55集・第56集機関誌編集委員

日本：大矢 一人(藤女子大学)

沖田 行司(同志社大学)

木村 元(一橋大学)

湯川嘉津美(上智大学)

東洋：佐藤 由美(埼玉工業大学)

新保 敦子(早稲田大学)

西洋：小松佳代子(東京藝術大学)

寺崎 弘昭(山梨大学)

一般：今井 康雄(東京大学)

大桃 敏行(東京大学)

〈第2回理事会にて選出〉

■第55回書評委員

日本：沖田 行司(同志社大学)

小山 静子(京都大学)

湯川 次義(早稲田大学)

東洋：大塚 豊(広島大学)

北村 嘉恵(北海道大学)

西洋：遠藤 孝夫(岩手大学)

白水 浩信(神戸大学)

3. 『日本の教育史学』第54集の刊行

機関誌第54集を担当した委員会（梶山雅史委員長）より以下の報告があった。

投稿本数29編、受理論文24編（日：19、東：2、西：3）で、文字数超過等による不受理が5編あった。今年度から「図書紹介」を新設し、また「特別寄稿」を掲載するなど、内容を充実させた。また、裏表紙を、研究論文タイトルと著者名に加え、目次の5項目も英文で表記することとした。

4. 研究動向欄の廃止について

事務局より、研究動向欄の廃止について報告がなされた。

【審議事項】

1 及び 2. 第54回大会年度決算及び審査

事務局より、資料（別掲「第54回大会年度決算報告案」→4頁）にもとづいて説明され、引き続き、監査報告がなされ、両案とも異議なく承認された。

3. 第55回大会年度予算

事務局より資料（別掲「第55回大会年度予算案」→6頁）にもとづいて説明され、審議の結果、異議なく承認された。

4. 教育史学会会則改正

事務局より資料（別掲「会則現行・改正案新旧対照表」→7頁）にもとづいて説明があった。入会金の廃止と年会費の減額など、審議の結果、改正案は承認された。

5. 教育史学会研究奨励賞規程改正

事務局より資料（別掲「教育史学会研究奨励賞規程」→8頁）にもとづいて説明があり、審議の結果、改正案は承認された。

6. 第56回大会の開催校

辻本代表理事より、第56回大会をお茶の水女子大学で開催したい旨提案され、承認された。

以上をもって議事はすべて終了した。

引き続き、審議事項6をうけて、第55回大会準備委員長の米田俊彦会員からご挨拶をいただき、総会は閉会した。

【第1回教育史学会研究奨励賞授与式】

総会の前に、第1回教育史学会研究奨励賞の授与式が行われた。

受賞者と受賞論文は次のとおり（カナ順、敬称略）。

井岡 瑞日

「フランス第三共和政期前半における女子中等教育と「家庭教育」一週刊誌『ル・プチ・エコー・ド・ラ・モード』の分析を中心に」

江口 潔

「百貨店における教育一店員訓練の近代化とその影響」

湯川 文彦

「教育令制定過程の再検討」

受賞者の井岡瑞日会員、江口潔会員、湯川文彦会員に賞状と賞金が授与され、授賞者のスピーチが行われた。



第1回教育史学会研究奨励賞授与式の様子

第54回大会年度決算報告

収支計算書 (2010.9.1～2011.8.31)

収入

単位：円

費目		予算	決算	差異	備考
会費	54回年度個人会費	4,641,000	4,720,000	79,000	納入者787名 納入率83.7% (前年比+6.2%)
	過年度個人会費	500,000	580,000	80,000	
	小計	5,141,000	5,300,000	159,000	
入会金	54回年度入会金	10,000	24,500	14,500	49名
売上金	機関誌売上げ	294,000	356,895	62,895	日本図書センターに委託 計139冊 日本図書センターに委託 計47冊
	50周年記念誌売上	26,250	11,750	-14,500	
	小計	320,250	368,645	48,395	
雑収入	受取利息	10,000	67,426	57,426	
	情報システム研究所	50,000	126,148	76,148	
	小計	60,000	193,574	133,574	
当年度収入合計 A		5,531,250	5,886,719	355,469	
前年度繰越金 B		13,224,664	13,224,664	0	
収入総計 C=A+B		18,755,914	19,111,383	355,469	

支出

単位：円

費目		予算	決算	差異	備考
大会費	大会運営費	1,150,000	1,150,000	0	第54回大会 (早稲田大学)
編集費	機関誌刊行費	628,000	628,000	0	第53集印刷費 (1100部) 奨励賞選考委員会92,340 奨励賞編集委員会4,000 書評委員会5,960 英文校閲80,000 研究動向欄文献収集費補助金50,000
	編集複写費	10,000	7,294	-2,706	
	編集交通費	600,000	516,820	-83,180	
	編集会合費	40,000	37,090	-2,910	
	編集通信費	30,000	27,200	-2,800	
	編集消耗品費	5,000	1,520	-3,480	
	編集謝金	140,000	130,000	-10,000	
	編集人件費	200,000	200,000	0	
	編集雑費	5,000	0	-5,000	
	書評等原稿謝金	15,000	0	-15,000	
	書評用図書購入費	70,000	70,000	0	
	振込手数料	0	1,234	1,234	
	小計	1,743,000	1,619,158	-123,842	
事務局経費	人件費	850,000	1,085,750	235,750	大会アルバイト7,000 会報送付アルバイト52,500 理事会準備、会計補助11,000 理事会532,150 会報送料148,320 機関誌送料106,190 会報172,250 会費送金48,815
	旅費交通費	650,000	633,270	-16,730	
	会合費	20,000	41,267	21,267	
	奨励賞関係費	210,000	0	-210,000	
	通信運搬費	300,000	222,777	-77,223	
	消耗品費	60,000	332,165	272,165	
	印刷製本費	150,000	172,250	22,250	
	手数料	50,000	56,998	6,998	
	HP管理運営費	60,000	110,000	50,000	
	移転費用	100,000	94,600	-5,400	
小計	2,450,000	2,749,077	299,077		
国際シンポジウム関係費	旅費交通費	440,000	356,600	-83,400	通訳405,982 翻訳275,000 オペレーター84,000
	謝金	730,000	764,982	34,982	
	印刷代	110,000	108,675	-1,325	
	通信運搬費	50,000	2,660	-47,340	
	会合費	70,000	68,060	-1,940	
	小計	1,400,000	1,300,977	-99,023	
雑支出	雑支出	10,000	0	-10,000	
予備費	予備費	200,000	204,565	4,565	供花代4,515 税金50 寄付金200,000
当年度支出合計 D		6,953,000	7,023,777	70,777	
当年度収支差額 A-D		-1,421,750	-1,137,058	284,692	
次年度繰越金 E=C-D		11,802,914	12,087,606	284,692	
支出総計 D+E		18,755,914	19,111,383	355,469	

貸借対照表 (2011. 8. 31 現在)

資産

単位：円

費目		金額	備考
現金	現金	21,320	
預金	郵便振替	4,878,834	みずほ銀行定額預金・普通預金より引継ぎ
	ゆうちょ銀行	1,340,314	
	ゆうちょ銀行定額貯金	5,000,000	
	福岡銀行	26,161	
	西日本シティ銀行	5,192,478	
	小計	16,437,787	
前払・仮払	大会前払仮払金	1,150,000	第55回大会 (京都大学)
資産総計 F		17,609,107	

負債・積立金および繰越金

単位：円

費目		金額	備考
前受金	55回年度会費	114,000	6,000*19名
	55回年度入会金	0	
	小計	114,000	
積立金	将来計画積立金	5,000,000	ゆうちょ銀行定額貯金
調整金		407,501	
負債・積立金合計 G		5,521,501	
第55回大会年度への繰越金 H = F - G		12,087,606	
負債・積立金・繰越金総計 G + H		17,609,107	

会計監査報告

第54回大会年度会計につき監査を実施し、収支決算および資産管理が適切になされていることを確認しました。

2011年9月23日

監査 柏木 敦 (印)

監査 高橋 陽一 (印)

第 55 回大会年度予算案

収入

単位：円

費目		55回予算	54回決算	備考
会費	55回年度個人会費	4,590,000	4,720,000	6,000*900名*85%
	過年度個人会費	500,000	580,000	
	小計	5,090,000	5,300,000	
入会金	55回年度入会金	0	24,500	
売上金	機関誌売上げ	294,000	356,895	2,100*140冊
	50周年記念誌売上	26,250	11,750	250*100冊*1.05
	小計	320,250	368,645	
雑収入	受取利息	10,000	67,426	
	情報システム研究所	50,000	126,148	
	小計	60,000	193,574	
調整金繰入		407,501	0	
当年度収入合計 A		5,877,751	5,886,719	
前年度繰越金 B		12,087,606	13,224,664	
収入総計 C=A+B		17,965,357	19,111,383	

支出

単位：円

費目		55回予算	54回決算	備考
大会費	大会運営費	1,150,000	1,150,000	
編集費	機関誌刊行費	854,000	628,000	第54集印刷費 奨励賞選考委員会旅費50,000 5,000*3本
	編集複写費	10,000	7,294	
	編集交通費	600,000	516,820	
	編集会合費	50,000	37,090	
	編集通信費	30,000	27,200	
	編集消耗品費	5,000	1,520	
	編集謝金	140,000	130,000	
	編集人件費	200,000	200,000	
	編集雑費	5,000	0	
	書評等原稿謝金	15,000	0	
	書評用図書購入費	70,000	70,000	
	振込手数料	1,500	1,234	
	小計	1,980,500	1,619,158	
事務局経費	人件費	1,180,000	1,085,750	アルバイト100,000 幹事600,000 幹事補助480,000 第1回研究奨励賞(第54集) 副賞50,000*4名 賞状2,500*4名 会報等印刷費
	旅費交通費	650,000	633,270	
	会合費	40,000	41,267	
	奨励賞関係費	210,000	0	
	通信運搬費	300,000	222,777	
	消耗品費	60,000	332,165	
	印刷製本費	180,000	172,250	
	手数料	50,000	56,998	
	H P 管理運営費	80,000	110,000	
	移転費用	0	94,600	
名簿刊行費	240,000	0		
小計	2,990,000	2,749,077		
国際化促進関係費	旅費交通費	600,000	356,600	通訳、翻訳、テープ起こし等
	謝金	100,000	764,982	
	会場費	0	0	
	印刷代	100,000	108,675	
	通信運搬費	50,000	2,660	
	会合費	40,000	68,060	
	消耗品費	10,000	0	
小計	900,000	1,300,977		
雑支出	雑支出	10,000	0	
予備費	予備費	200,000	204,565	
当年度支出合計 D		7,230,500	7,023,777	
当年度収支差額 A-D		-1,352,749	-1,137,058	
次年度繰越金 E=C-D		10,734,857	12,087,606	
支出総計 D+E		17,965,357	19,111,383	

会則現行・改正案新旧対照表（2011年10月）

改 正 案	現 行
<p>(第1条～第3条・第5条～第15条・第17条省略)</p> <p>(会員・会費等)</p> <p>第4条 本学会の会員になるためには会員1名以上の紹介により、入会申込書を提出しなければならない。会員は退会届を提出して退会することができる。</p> <p>2 会費は、年額 <u>5,000</u> 円とする。ただし、学会の認定する留学生会員の会費は <u>3,000</u> 円とする。</p> <p>3 (削除)</p> <p>(経 費)</p> <p>第16条 本学会委の経費は、会費、その他の収入をもってこれにあてる。</p> <p>(会則の変更)</p> <p>第18条 本会則の変更は、総会の決議による。</p> <p>(付 則)</p> <p><u>この改正は、第55回大会年度より施行する。ただし、第4条第2項については第56回大会年度より施行する。</u></p> <p><u>会費の金額に関する規定については、第64回大会年度中に見直しを検討することとする。</u></p>	<p>(第1条～第3条・第5条～第15条・第17条省略)</p> <p>(会員・会費等)</p> <p>第4条 本学会の会員になるためには会員1名以上の紹介により、<u>入会申込書と共に入会金を納入しなければならない。</u>入会金は500円とする。会員は退会届を提出して退会することができる。</p> <p>2 会費は、年額 <u>6,000</u> 円とする。ただし、学会の認定する留学生会員の会費は <u>4,000</u> 円とする。</p> <p>3 <u>会員は第3条第2号による機関誌および会報の無料頒布を受けることができる。ただし、機関誌については会費完納者に限る。</u></p> <p>(経 費)</p> <p>第16条 本学会の経費は、会費、<u>入会金</u>、その他の収入をもってこれにあてる。</p> <p>(付 則)</p> <p><u>本会則の変更は、総会の決議による。</u></p> <p><u>この改正は、第54回大会年度より施行する。</u></p>

教育史学会研究奨励賞規程 現行・改正案対照表 (2011年10月)

改正案	現行
<p>第1条 (省略)</p> <p>第2条 奨励賞を授賞する「若手会員」は、次の各号のいずれかに該当する会員とする。</p> <p>1 当該『日本の教育史学』が刊行される年度の4月2日において39歳以下である者。</p> <p>2 当該『日本の教育史学』が刊行される年度が、大学院博士後期課程に入学した年度から数えて10年目以内である者、<u>もしくはそれに準ずる者。</u></p> <p>第3条 (省略)</p> <p>第4条 (省略)</p> <p>第5条 (省略)</p> <p>(附 則) この規程は、<u>第55回大会年度</u>より施行する。</p>	<p>第1条 本規程は、会則第14条に基づき、教育史学会研究奨励賞(以下「奨励賞」という。)の授賞者、その選考手続き、などについて定める。</p> <p>第2条 奨励賞を授賞する「若手会員」は、次の各号のいずれかに該当する会員とする。</p> <p>1 当該『日本の教育史学』が刊行される年度の4月2日において39歳以下である者。</p> <p>2 当該『日本の教育史学』が刊行される年度が、大学院博士後期課程に入学した年度から数えて10年目以内である者。</p> <p>第3条 毎年度の奨励賞の授賞者は、おおむね4人程度とする。</p> <p>第4条 奨励賞の授賞者の選考は、教育史学会研究奨励賞選考委員会(以下「選考委員会」という。)が行う。</p> <p>2 選考委員会は、当該『日本の教育史学』の機関誌編集委員会の委員長、副委員長および委員長が指名する2ないし3名の委員をもって構成する。選考委員長は機関誌編集委員長を、選考副委員長は機関誌編集副委員長をもって充てる。</p> <p>3 選考は、機関誌編集委員会における論文掲載可否にかかる審査をふまえて行う。</p> <p>4 選考の具体的な手続きについては、別に定める。</p> <p>第5条 奨励賞は、総会において代表理事が授与する。</p> <p>2 奨励賞は、賞状および副賞とし、副賞は、金5万円とする。</p> <p>(附 則) この規程は、<u>第54回大会年度</u>より施行する。</p>

(1) 1930～40年代日本における教育団体の変容と再編過程(3)

一戦時期から戦後初期への変転—

梶山 雅史(岐阜女子大学)

このコロキウムは、戦前における最大の教育団体・組織であった中央・地方教育会、また海外における教育会の活動実態から近代日本教育史の再検討を目的とするものであり、本年度で7回目の開催となる。本年度は、戦前の教育会の最終段階の様相、戦争末期から戦後にかけて教育会がどのように組織を再編し、どのように変容していくのかを事例に即して問うことを目標とした。

梶山の趣旨説明の後、新谷恭明会員と佐藤幹男会員とによる2つの報告があり、この報告を受けて自由な議論、意見交換を行った。41名の参加を得て活発な議論が行われた。

新谷会員は「1940年代前半における福岡県教育会『福岡県教育』掲載論攷の検討 一会員の投稿論攷の検討」と題し、1940年1月号から1945年7月終刊号までを通覧し、主要な執筆者、記事の内容別分析を行った。今後の研究課題として、以下の提言を行った。(1)教育会雑誌のライターであり、戦後も教育界で発言を続ける人物の分析、(2)国の教育政策との関わりで雑誌の論攷——たとえば科学教育、武道教育などの位置づけと評価、(3)体験記や雑感など、地方の独自記事に現れた教育会活動の息吹の分析、(4)ジェンダーの視点を取り込んだ分析。テーマとして断片的に散らばった雑誌記事から、地方教育会の実態をいかに再構成していくか。これは地方教育会史研究の方法論に関わる根本的な課題であろう。

佐藤会員は「地方教育行政と職能成長—「校長(会)」と教育研究—」と題し、主として戦後から1960年代に至る校長会と地域教育研究団体の機能に注目し、戦前における地方教育会の機能が、校長会と地域教育研究団体に継承されていったとの仮説を提示した。たとえば、1950年代の宮城県下における地域教育研究団体の事例から、教育研究団体が戦前の郡市教育会と同じ地域単位で営まれていたこと、組合活動とは一線を画しつつ、公費依存、校長会主導で行われていたことを示した。その上で、とくに校長たちが戦前戦後を通して教師の職能成長をどのように担ってきたか明らかにする必要があると

の新たな研究課題を提示した。

参加した会員からは様々な意見が出されたが、3点に絞って論点を紹介する。第1点は、勝山吉章会員から、地方教育会雑誌ほどの程度読まれ、どの程度の影響力があったかとの質問。新谷会員からは、教育会雑誌は全会員に配布されていたこと、また同人誌的な要素もあり、時代の情報が伝わって行くのには十分であったことが推測されるとの答えがあった。なおこの情報統制の時代、発行を継続しえていた教育雑誌の編集者と編集方法について掘り下げる必要がある。

第2点は、梅村佳代会員からの質問であり、『三重教育』を通読したことがあるが、執筆者の傾向、テーマの傾向などにおいて新谷会員の報告と同様の印象を持ったとの感想が寄せられた。三重県の場合、国語科に綴方教育のリーダーがおり、生活綴方教育の雑誌も出されており、教育会雑誌を分析する際には、他の地方教育雑誌も視野に入れ、複眼的に分析をすべきとの指摘がなされた。

第3点は、白石崇人会員から佐藤会員に対する質問である。戦前と戦後の教育関係団体を連続的に捉えたとすれば、校長の役割に注目することは大事であり、その際、「教育研究」というコンセプトをどのように把握しているか、その吟味が必要であるとの提言があった。佐藤会員からは、戦後の一時期は明治の初期とイメージが重なり、すべてが未整備、未確立の中で校長が中心的な役割を果たしたことは事実であること、校長中心の「教育研究」については、戦前と戦後で意味内容が変化している可能性もあり、慎重な扱いが必要であるとの回答があった。

その他、千葉昌弘会員から戦後校長像の変容、官制教研と自主教研、教育会の財産所有権問題などの論点提示、佐々木順二会員から盲聾学校設立への教育会の関与、小野雅章会員・小林彰彦会員から信濃教育会の特色についての言及等々、刺激に充ちた新たな研究課題や研究視点を提示していただいた。

最後に、梶山から戦前と戦後の教育関係団体の関連を考察していく上で、校長会の存在、師範学校附属学校の役割、戦後も存続する日本連合教育会の存在も今後の研究課題であることを指摘した。重いテーマでありつつも、しばしば笑いの響く充実した研究交流の場が生まれ、遅くまで参加していただいた方々に心からお礼を申したい。

(2) 戦前期中等諸学校における『校友会雑誌』と「学校文化」の研究

堤ひろゆき (東京大学(院))

稲井智義 (東京大学(院)・日本学術振興会特別研究員)

本コロキウムでは、中等諸学校を対象とする上でこれまでほとんど注目されてこなかった『校友会雑誌』という媒体そのものに焦点を当てた。報告の中心は、全国的な調査・蒐集およびデータベース化の成果と、『校友会雑誌』という史料の特性についてであり、今後の研究に向けての基礎をなす内容であった。

当日の報告は斉藤会員を代表とする科研費報告書『旧制中等諸学校の『校友会誌』にみる学校文化の諸相の研究と史料のデータベース化』の内容も適宜参照しながら、豊富な史料に基づいて、5つの報告がなされた。斉藤報告「趣旨と研究テーマ」および「表紙の変遷にみる『校友会雑誌』の性格」では、『校友会雑誌』の史料的価値について述べたのち、表紙の変遷から学校文化と社会的な状況の変化の関連を取り上げた。市山報告「校友会雑誌の多様性—中学校および高等女学校の校友会雑誌の書誌的分析から」では、内容分析の基礎となる『校友会雑誌』の誌面構成について整理し、その意義について検討を行った。

森田報告「青年批判と向き合う中学生—当事者による青年論の展開」では、愛知一中の中学生の青年論に注目し、校友会雑誌に当事者にとっての応答の場という機能があったことを示唆した。歌川報告「校友会雑誌と同窓生ネットワークの形成」では、跡見高等女学校の『校友会雑誌』に掲載された「消息欄」に注目することで、『校友会雑誌』が同窓生ネットワーク形成に重要な役割を果たしたことを示した。瀬川報告「校風を映す校友会雑誌—ユーモア精神の継承」は、生徒の文章の中でユーモアにあふれたものを取り上げ、学校や教員の権威に対する生徒の拮抗・順応という関係を読み解くものであった。

これらの報告を踏まえ、会場からは『校友会雑誌』の発行母体である校友会の運営や財源についての質問や当時の新聞・雑誌と比較してみえる愛知一中の特徴とは何かといった質問が出され、史料論にとどまらない踏み込んだ分析と議論が強く求められていることが感じられた。また、未見の史料についての情報交換も活発になされ、更なる調査の充実に向けて課題が明確になった。この場を借りて、長時間の報告を聴き、有益な意見を提示してくれた参加者の方々にお礼を申し上げたい。

本コロキウムの報告と議論から、『校友会雑誌』の史料的価値は十分に提示できたものと考えられる。今後は、『校友会雑誌』の内容により踏み込んだ議論と分析が行われ、学校文化研究を大きく発展させる必要があるだろう。本研究会は今回の成果を引き継ぎ、学校文化により焦点化して研究を進めていく予定である。

(3) 近代日本におけるエリート教育の編成

—明治期と大正期との対話—

オルガナイザー 富岡 勝 (近畿大学)

「近代日本におけるエリート教育の編成 —明治期と大正期との対話—」と題したコロキウムを、30名近くの会員の参加を得て開催することができた。荒井明夫会員 (大東文化大学) の司会により、小宮山道夫会員 (広島大学) の報告「エリート教育再編に関わる 1880 年代研究の現状—『1880 年代教育史研究年報』記事を中心に—」、大正期の関連テーマを研究する吉川卓治会員 (名古屋大学) と小針誠会員 (同志社女子大学) の 2 名の指定討論者からのコメント、および全体討論が行われた。

小宮山会員は、『1880 年代教育史研究年報』第 1 号・第 2 号・第 3 号 (2009 年～2011 年) などで公表された研究成果を、「制度構想」「制度受容」「関係人物」「教育内容」「生徒動態」「周辺史料」の 6 つのアプローチから研究成果と課題を報告した。

この報告に対して、著書『公立大学の誕生 近代日本の大学と地域』(名古屋大学出版会、2010 年)において大正期以降の「大学と地域」について考察した吉川会員は、田中智子「府県連合学校構想史試論 1880 年代における医学教育体制の再編」(『1880 年代教育史研究年報』第 1 号、2009 年) に注目し、「1902 年や 1918 年の史料においても府県連合学校のような構想が見られるので、1880 年代以降の府県連合学校構想についても明らかにする必要がある」ことなどを問題提起した。

もう 1 人の指定討論者の小針会員は、著書『くお受験』の社会史 都市新中間層と私立小学校』(世織書房、2009 年) で 1920 年代から 1950 年代における都市新中間層の私立小学校入学志向と入学選抜に関する歴史社会学的な分析を行った立場から、「1880 年代という狭い時期を研究対象として扱うことの意義は何か」「高等中学校を研究対象とすることの意義は何か」「この共同研究で議論の対象とする「エリート」とは何を指し、どのような方法でそれを分析するのか」といった研究テーマの根幹に関

わる問題提起を行った。

このコロキウムは、「1880年代における高等普通教育と専門教育の再編」というテーマに、2010年度からは科学研究費（基盤研究（B）「1880年代におけるエリート養成機能形成過程の研究—高等学校成立史を中心に」、代表者荒井明夫）の交付を受けながら取り組んでいる1880年代教育史研究会の活動を、「異なる時期を扱っている多くの会員との対話を通じて検証したい」という意図で企画した。上記のような指摘や問題提起を受けることができたのは大きな成果である。しかし企画者側の準備不足により、会場での討論を深められなかったこと、若手会員を含む参加者から十分意見をいただくことができなかったことが大きな反省点である。今後、本研究会のニューズレター（研究会HPでも公開）、研究年報そして教育史学会での活動などを通して少しでも補っていきたい。

(4) 「近代教育」のなかの古典と道徳

—地域間比較の試み—

長谷部圭彦（日本学術振興会特別研究員）

一般に「近代教育」と見なされているものは、いかにして世界規模で形成されたのか。本コロキウムでは、その過程を構造的かつ動的に把握するために、その糸口として、19世紀から20世紀前半のユーラシア大陸における「教育」を比較史的に検討した。

まず、宮澤康人会員から、梅根悟監修『世界教育史大系』を有する日本は、世界教育史研究において「飛び抜けて先進国」であること、しかしそれは十分には自覚されてこなかったことが指摘された。それを承けて長谷部圭彦会員は、比較史的な研究を進める際には、こうした蓄積を踏まえつつ、世界史的な視座から対象地域を選定する必要があることと、一般に「教育」は、文字および宗教と密接な関係があることを確認したうえで、本コロキウムでは、この二つに基づいてユーラシア大陸を大きく区分するとともに、「前近代」と「近代」の連続性に配慮するためにも、比較の軸として古典と道徳を採用するという方針を明確にした。

こうした趣旨説明の後、まず宮原佳昭氏が、儒教と仏教が広く浸透し、漢字とそれから派生した文字が創出された地域について、清末から民国期の中国を事例に検討された。宮原氏は、儒教の經典の学習方法である「読経（どくけい）」をめぐる議論の経緯を辿り、四書五經の扱い方は、当時、政治的論点の一つでもあったことを示された。

次に、イスラームが価値の根幹を形成し、様々な言語がアラビア文字で記された地域の事例として、磯貝真澄氏が、ロシア帝国統治下のムスリム知識人を取りあげ、「新方式」教育における道徳教科書の系譜を考察された。その結果、1880年代に提唱された「新方式」教育は、いくつもの「近代的」な要素を含むとはいえ、とくに道徳教育は、それ以前のマドラサ教育におけるアダブ（教養）の教育伝統を継承していたことなどが明らかにされた。

最後に、キリスト教に基づく世界観が構築され、ラテン文字が広く行き渡った地域について、岡本託氏が、19世紀のフランスにおける上級行政官試験を題材に、人文古典知識の扱われ方を検討された。筆記試験の答案をも分析された岡本氏は、19世紀末に、言葉を装飾する「文彩」教育は衰退したものの、修辭学的知識は、20世紀初頭においても、文章構成という形で間接的に問われていたことを指摘された。

以上の報告の後、コメンテーターである森岡伸枝会員から、各報告への個別の質疑に加えて、すべての報告者に対して、「近代教育」において「古典」はいかなる機能を担っていたのか、あるいは担わされていたのか、という質問がなされた。また、15名程の参加者を交えた討論においても、各地域の「古典」は暗誦によって「身体化」されたのか、宗教性は帯びているのか、そもそも「古典」は自明の存在とは言えないのではないか、といった活発な議論が展開された。今後は、今回扱うことのできなかった、ヒンドゥー教と仏教そして梵字を特徴とする地域なども対象として、議論のさらなる深化を目指したい。

(5) 男女別学から男女共学へ

—セクシュアリティと男女交際

小山 静子（京都大学）

これまで、男女共学や男女別学に関する研究は、制度史・政策史を中心に進められており、男女の特性や性別分業といったジェンダーの問題として論じられてきた傾向がある。しかし、男女共学を思春期の男女が共に学校生活を過ごすことという観点からとらえてみれば、男女共学か男女別学かという問題は、まさにセクシュアリティの問題としても浮上してくるのではないだろうか。男女共学／男女別学が特に問題として語られるのは中等教育段階であるが、いうまでもなく、中等教育機関に通う男子生徒と女子生徒は、思春期のまっただ中を生きている。にもかかわらずというべきか、だからこそというべ

きか、彼ら・彼女らは〈性〉が隠された学校空間を生き、教育史研究においてもセクシュアリティの問題は等閑に付されてきた。生徒たちのセクシュアリティのありようや男女交際の問題は、いったいどのようなものとして考えられていたのだろうか。本コロキウムは、このような問題を中等教育における男女別学から男女共学への転換と絡めながら考察したものである。

具体的にいえば、前川直哉が「学生男色と女学生と登場」と題して、明治期に流行した学生男色（学生同士の男色）とその背景、女子中等教育の制度的整備にともなう女学生の登場を機とした学生男色の変容、そして男子学生をとりまく性の環境の変化を報告した。それを通して、男女交際という概念が立ち上がり、男子学生が女学生と交際するという事態が想定されるに至ったことが明らかにされた。次いで、今田絵里香が「男女共学と少女雑誌における異性愛象徴」において、戦後、男女共学が実施されたことによって男女交際イメージが大きな変容を迫られた結果、少女雑誌が異性愛をどのように扱い、女

子生徒をどのような性的な存在として表象するようになったのかについて報告した。そこから明らかになったのは、女子生徒にとっての異性愛というものの登場である。そして小山静子が「男女共学と純潔教育の登場」で、文部省が戦後すぐから取り組みはじめた純潔教育が、どのような社会的文脈によって行われたのかという問題を取りあげ、男女共学の意義を男女相互の理解に求める言説が純潔教育の必要性を導き出していくことを明らかにした。

最後に、指定討論者の小玉亮子が、理想化された男色関係やエスの関係、あるいは純潔教育で語られる男女の関係における非対称性の問題、セクシュアリティにまつわる身体性のありよう、現実の男子学生（男子生徒）と女学生（女子生徒）の世界のありように関する問題提起を行った。そして参加者（約20名）を交えての意見交換と進んだが、参加者からの発言はさほどなく、本コロキウムがどのように受けとめられたのか知ることができなかったのは残念である。

大会参加記

【あいうえお順】

(1) 教育史学会第55回大会に参加して

荒井 明夫（大東文化大学）

毎年、教育史学会大会とその前日の中等教育史研究会は欠かすことのできない研究交流の場として大学院生の頃から余程の事情がない限り参加し続けてきた。教育史学会第55回大会もこれまでの大会同様、いやそれ以上に知的刺激に満ち溢れた充実した大会であった。大会準備に関わりながら積極的に研究成果を発表し、その意味で二重に大会成功に貢献された駒込武大会準備委員長はじめとする準備委員の関係者、京都大学大学院生のみなさんに心から御礼申し上げたい。

毎回の大会での楽しみの一つは、会員控室での情報交流にあるが、今回は会員控室にほとんど立ち寄る時間がない程に研究発表を渡り歩いた。その最大の理由は、代表理事も御挨拶の中で指摘されたが、大学院生を指導する立場にある教育史学界の最先端をいく会員の発表が多くあったことである。私は、鈴木理恵会員・八鍬友広会員・駒込武会員の研究発表を聴き学ぶことができた。いずれも先行研究をふまえかつ実証的に事例を位置付け、全体の動向を描

ききる見事な成果発表であり、こうした研究発表を聴く事のできた院生諸君には大変勉強になったにちがいない。もちろん大学院生・若手研究者の発表も刺激的な発表が多かった。

気になったことがある。私自身が司会を努めた分科会でのことだ。どの発表も大変勉強になったが「儒教主義」という言葉が十分な定義抜きで使用された例が散見された。何が「儒教主義」なのか厳密な定義が必要で、結果「儒教」ではないことにもなる。

大会シンポジウムからも多くを学んだ。大成功ともいってよい成功の裏には、大学史の専門家が大学史を語るシンポジウムで、しかもテーマ設定にこめられたアクチュアリティにあると思われる。シンポジウムのあり方が問われる中、企画のあり方など今後のヒントになる要因が少なくないと思った。指定討論者・羽田会員による「教育史研究者は現状分析をすべきである」という指摘に考えさせられた。主張の趣旨は理解でき、基本的には賛成だが「現状分析と課題意識とは違うはずだ」という異論をもった。現状分析のまま歴史研究から遠ざかる研究者もいるしその逆もまたある。いずれにしても問題は、教育史学の社会的責任—その一つに今日の教育について

の歴史的説明責任をもつという課題をどのように引き受けるかにあると思う。今後も深めるべき課題であると思った。

(2) 教育史学会第 55 回大会に参加して

江頭 智宏 (鹿児島大学)

教育史学会は今回が 11 回目の参加で、7 年ぶりに自由研究発表をしました。以下、1 日目と 2 日目の午前の自由研究発表や、学会に参加して得たことについて記します。

私が発表した 1 日目の第 3 会場は、近年では珍しく、4 つの発表ともドイツ語圏を対象とした部会でした。本部会の他の発表はいずれも興味深いものでした。藤井会員のご発表は、『衛生問答』の記述内容の異同等について興味を引く史料を提示しながら論じられ、医学史的な視点をも踏まえつつ育児や教育の近代化について考察した極めて視野の広いものでした。清水会員のご発表は、保守革命論を分析軸としながら、私とは異なり難解な思想史的な観点から 20 世紀前半のドイツ教育学の図式やナチの問題に鋭くかつ丹念に迫られた極めて奥の深いものでした。田中会員のご発表は、1946 年のイシュー会議が職業教育改革に及ぼした影響を中心に据えながら、オーストリアの職業教育制度の変遷を詳細に取り上げた極めて緻密なものでした。私自身の発表に関しては、手持ちの史料をただ並べているだけであり、分析の浅さと粗さや、視野の狭さなどを強く認識しました。会場で頂いたご質問を大切にしながら、また 3 人の会員の先生方のご研究の方法に学びながら、今後とも精進したく思っております。2 日目の午前も第 3 会場に参加しました。3 件ともアメリカ新教育運動に関するご発表で大変興味深く拝聴しました。特にこの部会では総合討論の時間が有効に使われたように感じました。ご発表内容が近いこともあり、とりわけ発表者の会員の先生方どうしのやり取りもまた、ご発表自体と同様に大変に勉強になるものでした。

現在の勤務校に着任して 2 年以上が過ぎました。私の教育や研究の力量不足ということももちろん大きな要因ですが、そもそも教員志望の学生たちが西洋教育史という分野に全く興味をもっていないことを痛感しております。当然ながら卒業論文で西洋教育史関係のテーマを選択する学生はいません。学生教育に少しでも多く貢献したいと思っておりますが、学生のニーズにあまり応えることができず、学生に対して申し訳ない気持ちになります。

さらに教育委員会や学校が西洋教育史へのニーズを持っているとは思えないことも相俟って、自分の専攻へのある種の「誇り」が次第に失われているような感じがします（もちろん私自身がしっかり研究していればそんなことはないのでしょうか）。そうした中、2 日間にわたって貴重なご発表を拝聴し、また会員の先生方と教育や研究に関する様々なお話をさせて頂いたことは大変な励みになりました。

最後になりますが、貴重な機会を賜りました京都大学をはじめとする大会準備委員会の会員の諸先生方に厚く御礼申し上げます。

(3) 教育史学会第 55 回大会参加記

大内 裕和 (中京大学)

教育史学会第 55 回大会に参加した。なかでもシンポジウム「教育史研究における大学史研究の位置」は、興味深い内容であった。

このシンポジウムに参加したのは、自分がこのところ、大学史研究や高等教育研究に強い関心をもつようになったということが第一の理由としてあった。また報告者、指定討論者、司会者がそれぞれ魅力溢れる人物であったことも、足を運ばせる要因となったことは間違いない。

最初に報告されたのは寺崎昌男氏であった。「日本の近代教育史と「大学史」—相互の位置・役割・交流を考える—」というタイトルの報告は、教育史研究における大学史の位置を明瞭に浮かび上がらせる内容であった。

寺崎氏は報告の冒頭、大学史が教育史研究において「マイナー」な分野であったことの虚しさ、ラシュドール『大学の起源』を読んだ時に感じた、ヨーロッパにおける大学史研究と当時の日本の研究水準との「落差」を率直に語られた。

寺崎氏は次に、日本における大学史研究が不振であった歴史的事情と問題点を整理され、そうしたなかでも大学史研究が今日まで着実に進展してきたことを明言された。後半では大学史研究の今後に向けての提案と、大学史研究がもっている難しさについて言及された。大学史研究を牽引されてきた一人である寺崎氏ご自身の、長年の経験に裏打ちされた報告であった。

次に別府昭郎氏が、「教育史とドイツ大学史」というタイトルの報告を行った。別府氏は最初に「教育史と大学史」について、大学史が教育史の範疇に入っていないのはなぜかという問いを立て、その理由を整理された。これは寺崎氏の報告と同様の

論点であり、大学史研究の歴史的位置をあらためて浮き彫りにすることとなった。

次に別府氏は、ドイツにおいて個別大学史が盛んに書かれていることと大学史研究との密接な関係を論じられた。そして自らの明治大学史編纂作業の経験から、大学史研究において個別大学史を書くことの重要性を述べられた。

最後に、ドイツの大学史研究を歴史学者が担っていることと、ドイツにおいて優れた研究業績を発表している「大学史・科学史協会」の活動が紹介された。そして大学史は教育史の一領域であっても良いが、その場合には第一に大学における教育現象だけに限定するのではなく大学全般の歴史を扱うこと、第二に教育学以外の研究者が大学史研究に参入することを妨げないことであると課題をまとめられた。大学史研究におけるドイツと日本との違いを強く印象づけた報告であった。

最後の報告者である西山伸氏は、「大学史と教育史研究—沿革史を手がかりに—」というタイトルの報告をされた。西山氏は近年盛んとなっている大学沿革史編纂の現状を紹介され、大学沿革史において歴史学の成果が十分に生かされていない点を批判された。

しかしその一方で、大学沿革史が大学史研究を発展させていく上での前提作業となる可能性や、大学アーカイブスやその法的基盤である公文書管理法の制定など、大学史研究の基盤整備が進みつつあることも言及された。大学沿革史や大学史研究の現状における問題点と可能性の両面をよく伝えてくれる報告であった。

指定討論者の児玉善仁氏はイタリア大学史研究の立場から、羽田貴史氏は大学改革の現状分析を行っている立場から、それぞれ刺激的な論点を出された。手際のよい司会によって、フロアとの討論も盛り上がった。

大学史研究は、その多くが大学人である研究者によって行われる以上、「自らが自らの場所を問う」という自己言及的な作業を伴うものである。その点で今回のシンポジウムは、過去と現在という時間軸、日本と外国という空間軸の双方から、教育史研究者が自らの研究を問い直すきっかけとなる刺激的な内容であったように思う。

(4) 第55回大会に参加して

佐藤 隆之 (早稲田大学)

昨年の大会には、大会準備委員の一人として、またコロキウムを発表者として参加した。今年は研究発表を行うというかたちで、昨年とは異なる緊張感をもって京都に赴くことになった。

私が発表した部会は発表者が3名ということで、総合討論の時間が1時間とたっぷりあった。司会の先生方の手際よく要を得た仕切り、発表が同じアメリカ新教育史関連の研究であったことなどの好条件が重なり、掛け値なしに多くのことを学ぶ機会となった。

今回私は、キルパトリックのプロジェクト・メソッドを実践した成果をどのような方法で測定しようとしたのかという問いについて見えてきた答えを、「市民性尺度」の開発過程に絞って発表した。質疑応答のなかでは、アメリカとヨーロッパの断絶や連続を広く視野に入れたご質問をいただいた。「市民性尺度」は、移民の増加や産業化などの社会変化を背景とするアメリカナイゼーションの「基準」として尺度化されたのではないか。その尺度化は、カソリックを基底とする「共通善」の崩壊というアメリカ固有の事態を受けての再構築を意味するのではないか。「共通善」の習得を尺度で測定しようとすることは、信仰や人格を測定するという異端の取り組みであったのではないか。

宗教と測定の奇妙ともいべき組み合わせが成立した背景には関心があった。また、シティズンシップ教育が注目を集めている昨今、「市民性」に関わる質問があるだろうとは予想していた。しかし、正直、「共通善」がこれほど議論を呼ぶとは思っていなかった。その他、いくつものご質問をいただき、個人研究発表でこれほど発言した記憶はないほどである。こうして振り返ってみると、とくに「共通善」に関わることを中心として、十分に答えられなかったことも多く、こう答えればよかったと思うことがわき上がってくるが、今となっては後の祭りである。せめていただいた宿題には、今後しっかりとお答えできるようにしたい。

大会の運営に昨年関わった立場からも一言。今回の大会では、「第55回大会参加にかかわるアンケート」がはじめて行われたり、託児室が開設されたりした。発表者には当日の準備などに関する連絡を、直前までいただいた。プログラムをみるかぎり例年通りのようにみえても、大学や学会の事情などにより、大会の運営には工夫や創造が実は必要になる。

ここ数年、二年に一回の割合でいくつかの学会の大会の裏方を務めてきた経験から、そう感じている。今回は表から大会に参加させて頂いたが、プラスアルファの取り組みを導入し、会員のために行き届いた運営をされた準備委員会と事務局の先生方に御礼申し上げます。

(5) 今回大会のよい変化

高橋 陽一 (武蔵野美術大学)

第55回学会大会最大の慶事は、「教育史学会第1回研究奨励賞」であろう。2011年10月1日午後1時の総会に先だって京都大学紫蘭会館稲庭ホールにおいて、井岡瑞日会員、江口潔会員、湯川文彦会員に授与された。3会員にお祝いを申し上げるとともに、この制度を長期にわたり審議して準備された理事各位や、丹念な審査に当たった選考委員会各位に敬意を表したい。

従来は教育史に関する表彰は、日本教育史分野のみであり、「日本教育史学会」による「石川謙日本教育史研究奨励賞」があるだけであった。今回、教育史全分野をフォローするものが実現したことになる。また2011年度第24回から日本教育史学会は賞の名前を「石川謙賞」を正式名称として、教育史学会の奨励賞との違いを明確にした。こうした良い意味での棲み分けにより、他分野からもわかりやすい表彰システムができて、教育史研究の一層の進展が期待できるだろう。

また、辻本雅史代表理事がご挨拶で述べられたとおり、中堅クラス以上の会員による研究発表の増加も学会の水準向上からも望ましい傾向である。教育史学会が大学院学生の研究者としてデビュー戦としての性格をもち、学会賞はこれに登竜門たるの地位を与えたものであるが、学会発表数に比して拝聴して残念な発表が続くことが近年みられたことも確かである。今回、教育史研究の範を垂れるべき会員による重厚な個別研究発表やコロキウムが展開されたことは、今後の本学会の発展を予期させるものであった。私自身も研究発表から遠のいているので、諸先輩方の姿勢に学ばなくてはならないと自戒した。

最後になるが、京都大学の大会実行委員会の皆様の尽力には心より敬意を表したい。少なくない方々も感銘されたようだが、委員長の駒込武さんの高度な事務処理能力は、大学院生以来のおつきあいのなかでも新発見である。なお、学会事務局が九州大学へと移り、新谷恭明事務局長をはじめとした方々の

努力は、大会では見えにくいかも知れないが、感謝を申し上げたい。小生も監査を拝命してその日常的な努力と気配りを観察したので、ここに記さないわけにはいかない。決算処理の疑問点の解消もまた九州大学での事務局の方々の良識と知恵によるものである。

(6) シンポ「教育史研究における大学史研究の位置」に学ぶ

千葉 昌弘 (北里大学)

大学史研究が教育史研究の一領域を占めていることは自明のこととはいえ、その研究成果が、教育史研究の諸分野にいかなる課題や問題を提起しているのか、その大学史研究の位置と関係を問うというのが本シンポ開催の趣旨と解される。期待をもって参加したのであるが交通事情から到着が聊か遅延、会場はほぼ満席。止むなく最後列の補助椅子に座することとなった。従って、貴重な報告も時に聞こえずの状態に残念に思っていた。引き続き懇親会において突然の指名、「シンポの感想を」との司会者の要請で登壇と相成った次第。大学(高等教育)史研究が極めて乏しかった時代に学生・院生を過ごした事情の一端を述べておこうと諦念して、脈絡のない乱暴な個人的見解を吐露して任を終えた。我々が学生・院生であった70年代、60年安保の余韻覚めやらずの情況、授業料値上げ、大学の総合移転反対闘争等などの大学紛争が高揚していた時代である。学生の過半は紛争の渦中で教育・研究に専心していた。「大学とは何か」が問われ、「大学の自治」「学問の自由」の重要性が日常的に高唱され、当時の院生の多くは個々の研究テーマの研究に努めつつも大学問題が不可避の課題であった。大久保利謙・皇至道など大学者の大学史研究は存在していたが、いずれも高踏に過ぎ、わずかに家永三朗の「大学の自由の歴史」(62)に多くを学んだ。ラシュドールの「大学の起源」の横尾壮英訳が公刊されたのは66～68年、ハスキンス、アシュビー等の翻訳は70年代後半、何れもヨーロッパの大学史で、わが国の大学(高等)史研究は極めて希有な存在、そのような時代に先駆的に挑戦したのが寺崎昌男氏である。氏の「日本における大学自治制度の成立」である。66年に執筆の学位申請論文で公刊されたのは79年に至ってのこと。伊ヶ崎暁生「大学の自治の歴史」(65)が先駆するが、単なる大学制度史ではなく「自治」の歴史に着目したところに核心があった。「学問・思想の自由」を中核とする大学の歴史研究に感動を覚えたことを想

起した。シンポの第一報告はその寺崎氏の苦難に満ちた大学史研究の歩みに始まり、師範学校での教育史関連科目の導入と教授法の伝授の経緯、そして自らの「東京大学・立教学院」での百年史への参画、大学史は単なる制度の沿革でなくアカデミック・フリーダムの変遷を含むこと等の報告であった。続く報告はドイツの大学史研究の別府昭郎氏。

大学の起源を Academia 及び「教師と学生のギルド」(Universitas magistrorum) に関わって概念を「大学」の源流に遡りつつ書きドイツにおける大学史研究を可能としている理由として文書館(Archiv)の充実を指摘し、加えてその主要な担い手として歴史学者の存在を挙げている。続く第三の西山伸氏の報告は文書館勤務の経験にもとづいて80年代以降の大学沿革史の盛行に言及しつつ、資料点数・編集体勢の充実を指摘、制度沿革史中心で学問・学術・紛争・事件等の歴史評価を欠く傾向があること等を問題提起とする報告であった。3本の報告に続いて2人のコメントがなされた。児玉氏は、その起源に関わって学問的「自治的組織」たる大学史を存立の基盤にすえた研究の重要性を指摘しながら基本的には厳密な史料批判と歴史的解釈を含まねばならないことを問題提起した。続く羽田氏のコメントは聊か挑発的な、しかも刺激に満ちたものであった。高等教育全体の歴史のなかでの構造的解明、国際的な高等教育史研究との比較考察、学問の自由の存在如何、科学・技術史との関連、大学の構成員たる研究者・教員・学生の有り様をも含む歴史研究たるべきことを提案している。今日的大学問題に教育的にも研究的にも果敢な挑戦を続けている同氏の日常的課題意識を直截に吐露した観のある刺激的コメントであった。単なる史料の集積や事績の沿革に止まる大学史、或いは史料批判や歴史的評価を欠いた制度沿革史の類は、大学史でありえても大学史研究とはなりえない。史料批判・科学性・比較考察を欠いているからである。これらの要素に加えて学問・科学等の創造・自由の問題考察を欠いた大学史は存在の根拠を希薄にする。国家・教育政策との関係を抜きにした近代以降大学史もあり得ない。大学が量的には国民教育の機関となっている今日的状況を考えるならば、そこにおける学生と教育者(必ずしも研究者とは断じえない)の教育と研究の実態を捨象して大学史は成立し得ない。大学の構成員も大学史構成の重要な要素であろう。個別大学・学部史の単なる集合が大学史とはいえず大学史研究の成果とはいえない。70年代以降の潮木守一、80年代に至っての喜多村和之・天野郁夫、90年代以降の金子元久・藤田英典・竹

内洋・中野実等などの大学史に関連する貴重な研究成果が蓄積され、「世界教育史大系」において「大学の歴史Ⅰ・Ⅱ」も編まれた(1974)こと等も確認しておきたい。大学史研究において提起された課題は、特殊分野として棚上げすべき問題ではなく、教育史研究全般においても共有すべき課題として認識すべきが不可避であることを本シンポを通して再認識した次第である。自らを含めた大学人の教育と研究の今日的有り様を再考させるに相応しい、時宜を得たシンポであったと思う。報告者はもとよりシンポの企画と運営に尽力された関係各位にお礼を申しあげる。

(7) 第55回大会に参加して

奈須 恵子(立教大学)

教育史学会が10月第2週の土日開催の場合には、校務と重なりほぼ参加不可能であるが、今回は10月第1週の土日開催ということで、3年ぶりに参加することができた。

分科会では、第1日目午前の第2会場の後半、第2日目午前の第6会場、同日午後の第6会場で計9名の会員の研究発表を聞いた。とりわけ、第2日目午前の第6会場での3名の会員の発表とその後の総合討論は、様々な方向から知的関心を刺激されるものであった。

「植民地台湾における義務教育制度の施行」の発表は、1943年の「台湾公立国民学校規則」改正において「保護者ノ貧窮」が就学義務の免除要件とされたことや、「特別行政区域の先住民が義務教育制度の適用対象外となった」ことなどを含めて、植民地台湾における義務教育制度の施行のプロセスを資料をもって丁寧にあとづけるものであり、多くを学ぶことができた。それとともに、質疑応答では、「保護者ノ貧窮」を就学義務の免除要件としている限りはそもそも「義務教育」と言えるのだろうかという問いかけもなされ、「義務」の内実そのものを相対化して分析することの必要性を改めて認識させられた。

「占領期朝鮮人学校の教育費問題」と「戦後日本における朝鮮人教育と公教育制度」の発表からは、研究テーマ自体の重要さということとともに、日本の「占領期」の教育政策動向や実態を明らかにすることの大切さと難しさということを考えた。総合討論では、この2発表に対して、「占領期」を対象とする場合、GHQの動向をおさえることや、文部省の指示とそれについての地方自治体の対応の違いが存

在していたことに着目し、指示と違った対応を行う際の論理に着眼することが大切なのではないかという指摘がなされていたのが印象的であった。まとまった資料群を発見することは困難であっても、重要な「事実」の断片を拾い集めていくことによって、その「事実」をつなぐ糸の存在を明らかにすることは不可能ではないだろうし、この、「事実」の断片を積み重ねる作業が、やはり教育史研究には不可欠であると思った。

今回は、基本的に1つの分科会に通して参加するように意識し、上記の分科会のように総合討論の時間での質疑応答も含めて聞くことができたよかったです。と思える経験もできたが、ある程度共通性のあるテーマで分科会が組まれていくと、例えば、1930年代を扱った発表を聞きたいという希望は、なかなか叶えられないことになる。発表申込みを分科会に割り振りしていく作業に、事務局はご苦心されたのだろうと思いつつ、聞きたくても聞けない発表がかなりたくさんあったことは、唯一心残りであった。

(8) シンポジウムへ参加して

羽田 積男 (日本大学)

筆者は大学史や高等教育の歴史に興味を抱いてきた。「教育史研究における大学史研究の位置」と題するシンポジウムは、まさに垂涎の課題であった。

報告者には、寺崎昌男 (立教学院)、別府昭郎 (明治大学)、西山伸 (京都大学) の三氏が登壇した。日本の大学史研究を牽引してこられた人たちである。指定討論者にはイタリア大学史の児玉善仁 (帝京大学) と国際的な視点から日本の大学を考えてきた羽田貴史 (東北大学) が加わり、新谷恭明 (九州大学)、鈴木晶子 (京都大学) のお二人が学会を代表する形で司会を担当した。

シンポジウムの目玉のひとつには、ドイツから浩瀚なベルリン大学200年史をひとりで創り上げたハインツ＝エルマー・テノルト氏が参加する予定であったから、まさに大学史研究を基盤に据えたスケールの大きな教育史研究のシンポジウムが構想されていたのである。氏は健康上の理由のため参加できなかったが、その発表予定の原稿は翻訳されて「シンポジウム報告集」として配布されたので、新しいベルリン大学史研究の概略を目の当たりにすることができた。大会事務局の行き届いた配慮には頭が下がった。

まず寺崎会員が、大学史研究の「虚しさ」と「悔しさ」を吐露して、大学史研究の黎明期を振り返ったが、開拓者としての回顧は単なる懐古ではなく現

在に投げかけられた課題でもあろう。質疑応答において大学史研究は教育史研究に貢献できると語ったが、シンポジウムの課題に正面から向き合う発言であった。別府会員は、テノルト氏の不在を補いながら、ドイツでの大学史研究が歴史学の分野の人びとが担ってきた事情を自身の留学経験を交えながら語った。大学とは何かを定義しておく必要があるという発言は、拡散しがちな議論を引き締めたように思う。西山会員は、自身の京都大学の沿革史編纂を基調に据えて、大学史の盛行、個別大学史、アーカイブズの現状までを語りつつ、ともすれば内向き志向になりがちな自校史教育への陥穽にはまることに警鐘を鳴らした。

児玉会員は、ポーニア大学史を執筆した経験から、大学とは何かをその概念から根源的に質した。ヨーロッパの大学の歴史には、教育という視点が弱いのではないという指摘は、近代以前の大学が教育の組織であったという指摘と相まって、議論の流れを課題に向けて収斂させる方向へ導いた。羽田会員は、アメリカの大学の学問の自由と社会における自由のあり方を勘案しつつ、高等教育へと拡散する視点から議論を推し進め、かつ多彩な議論を誘発した。

大学の個別史から教育史へと向かう道筋は一筋でなくとも、いくつかの道筋がすでにでき上がりつつあることも事実であろう。テノルト氏のように真摯に道筋を歩むことが求められているように思えた。西山会員が準備した京都大学・大学文書館における常設展示と特別展示を詳細に見学した時、そのことにふと得心がいった。

第56回大会（2012年9月22日～23日）のご案内

第56回大会は、2012年9月22日（土）・23日（日）にお茶の水女子大学で開催することになりました。

お茶の水女子大学での開催は、第6回大会（1962年）以来で2回目です。50年ぶりの開催ということになります。なぜ50年間も開催されなかったのか、不思議です。決して不便な場所にあるわけではありません。東京駅から東京地下鉄丸ノ内線に11分ほど乗って、茗荷谷駅で降りて、会場まで徒歩10分くらいで到着します。宿泊施設は、池袋、新宿、

後楽園、御茶ノ水（神田）などにたくさんあります。

準備委員会は、私と小玉亮子会員を中心に、学内の教員や大学院生等、あるいは近隣の大学に在職している卒業生の会員で組織します。準備委員一同、多くの会員の皆様のご参加とご発表をお待ちしております。

第56回大会準備委員会
米田 俊彦（お茶の水女子大学）
yoneda.toshihiko@ocha.ac.jp



第55回大会（於京都大学）シンポジウム（1）



第55回大会（於京都大学）シンポジウム（2）

教育史学会の国際交流について

国際交流委員会委員長 理事・荒井 明夫

2011年6月4日に開催された理事会で、一見真理子・八鍬友広・遠藤孝夫と私・荒井明夫の4名の理事が国際交流担当理事として選出され、理事会内部の国際交流委員会を構成し荒井が責任者を努めることになりました。教育史研究の発展のために国際交流が活発に展開されることが不可欠であることはいうまでも無いことだと思います。

教育史学会として国際交流をどのようにすすめていくべきなのか、現在、担当理事間で議論を重ねています。基本方針は来年3月の理事会に提案する予定ですが、議論の経過を報告したいと思います。

基本的な方向性として現在検討しているのは、国際交流の日常化、ということです。

私ども教育史学会として、日常的な国際交流をい

かに創りあげていくか重要な課題なのではないでしょうか。教育史研究は日々深化し発展しています。日本国内だけに限らず世界にも広く視野を広げていくことが重要なのはいうまでもないことです。そうした研究交流の一環として、2009年から海外特別会員の設置が認められる等ようになりました（会則第13条）。現在は、第51回大会での国際シンポジウムに来日されたマンフレート・ハイネマン教授お一人が海外特別会員ですが、もう少し御協力頂ける海外特別会員を募る必要があると考えます。そうした海外特別会員を中心に研究・史料に関する交流を活発にしていきたいと考えます。また同じ目的からですが、教育史学会紀要『日本の教育史学』を広く海外の研究機関に送付するなどして一つ一つの研究

機関との交流の活性化を図ること、言い換えると、情報の発信と受容の日常化が必要だと考えます。そうした交流の中で、在外の教育史史料の貴重な情報を得ることが可能となるように思います。

国際交流の日常化とともに国際シンポジウムも可能な限り追求すべきだと考えますが、なにせ国際シンポジウムは主催するとなると大きな経費と準備が必要になります。そこで本学会が主催する国際シンポジウムは、必要に応じて検討することにし、当面は会員の勤務する大学などで国際シンポジウムや海外の研究者を招聘する機会に、本学会として後援する、などの形態で協力していきたいと考えます。

こうした協力は既に実行に移されています。御承知のように昨年教育史学会は第54回大会（於・早稲田大学）で国際シンポジウムを開催しましたが、大会の二カ月後、東北大学高等教育開発推進センターが田正平教授を招聘し公開セミナーを開催、国立教育政策研究所国際研究・協力部も東京においてセミナーを主催し教育史学会はそれを後援しました。学会は、後援した以上当然ではありませんが、この企画を会員に周知すべく努力してきました。その結果、同セミナーにおける田正平教授の報告「中国における教育史研究の現状と課題：教育史研究30年—観念・視野・方法」を『日本の教育史学』第54集に掲載することが可能となりました（掲載にあたりタイトルは少々変更がありました）。これを契機に、海外の研究動向を積極的に紹介したいと考えています。ところで、この田正平教授の報告を『日本の教育史学』に掲載する過程の説明が不十分だったことをお詫びしなければなりません。これらのことを紀要において明記すべきでした。あらためて翻訳を快諾された田正平教授及び『日本の教育史学』掲載に協力頂いた両機関に謝意を表します。

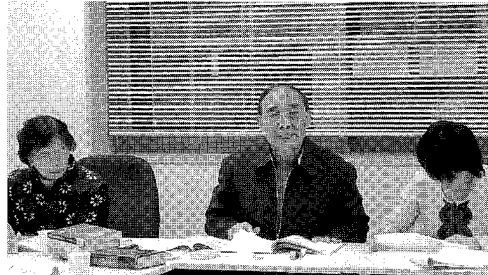
ここまで述べてきたように、国際交流活動をこれまで以上に重視したいと考えますが、各機関との学術団体に相応しい緊密な関係を築きあげていかねばなりません。そのため学会としてもルールの確認や内規創りも必要となると思います。会員の皆様方の積極的な御協力を是非ともお願い申し上げます。

（追記）

教育史学会後援の公開セミナー（東京）のご報告

2010年12月17日、仙台での公開セミナーでの登壇後、東京に足をのばされた田正平教授をお迎えして「中国教育史研究の現在」と題するセミナー、を国立教育政策研究所国際研究・協力部の主催で文科省旧庁舎内にて開催することができました。おかげさまで各世代の教育史研究者の参加があり、中国教育史学の発展とともに歩まれた田教授ならではの充実した講義をめぐり、またとない交流の機会となりましたことを、後援いただいた教育史学会ならびに田教授招聘の労をとられた東北大学高等教育開発推進センターへの御礼とともにご報告いたします。

（一見真理子記）



会員異動の詳細な情報は、すべて新会員名簿にゆずります。

* 新入会

河先 俊子	古仲 素子	花井 信
竹村 俊哉	上坂 保仁	田中 達也
杉山 実加	鈴木 亜里	梅野 正信
Stevenson III William Robert	経 志江	山根 実紀
孫 佳茹	後藤 篤	
知本 康悟	長野 和子	
堤ひろゆき	高田 麻美	

* 退会者

寄田 啓夫	平井 健二	平尾真智子
根生 誠 (逝去のため)	高木 靖文 (逝去のため)	松塚 俊三
高橋 和子	朝倉 征夫	宮本 光雄
舟山 俊明	阿部 洋	若木 太郎
望田 幸男	小野 一成	加藤 守通
池田 稔	向坂 成夫	
三原 芳一	鈴木 健一	
白石 晃一	竹村 佳子	
迫 共	東野 正明	
渡邊 健治	橋尾 四郎	

* 図書

- ・樋口修資『教育委員会制度変容過程の政治力学—戦後初期教育委員会制度史の研究—』明星大学出版部 2011. 5
- ・前川直哉『男の絆—明治の学生からラボーイズ・ラブまで—』筑摩書房 2011. 5
- ・柴田英樹『シュタイナーの教育思想—その人間観と芸術論』勁草書房 2011. 9
- ・宮澤康人『〈教育関係〉の歴史人類学—タテ・ヨコ・ナナメの世代間文化の変容』学分社 2011. 8
- ・日本教育史学会編『共に黄金の釘 打たん—石川松太郎先生の生涯と業績』2011. 4
- ・圓入智仁『海洋少年団の組織と活動—戦前の社会教育実践史』九州大学出版会 2011. 5
- ・ダイアン・ラヴィッチ著 末藤美津子訳『教育による社会的正義の実現—アメリカの挑戦 (1945 ~ 1980)』東信堂 2011. 5
- ・森田伸子『子どもと哲学を—問いから希望へ』勁草書房 2011. 10

* 紀要・ニューズレターなど

- ・『教育学論集』第7集 筑波大学大学院人間総合科学研究科教育基礎学専攻 2011. 2
- ・『中国関係論説資料 第51号 (平成21年分) 収録論文一覧』論説資料保存会 2011. 3
- ・『上智大学 教育学論集』第45号 上智大学総合人間科学部教育学科 2011. 3
- ・『安田女子大学大学院 文学研究科紀要』第16集 分冊教育学専攻第16号 (専攻通巻16 分冊通巻48) 安田女子大学大学院 文学研究科 2011. 3

- ・『日本仏教教育学研究』第19号 日本仏教教育学会 2011. 3
- ・『玉川大学教育博物館紀要』第8号 玉川大学教育博物館 2011. 3
- ・『名古屋大学 大学文書資料室紀要』第19号 名古屋大学大学文書資料室 2011. 3
- ・『名大祭—150年のあゆみ—』名大史ブックレット14 第51回 名古屋大学大学文書資料室 2011. 3
- ・『常磐研究紀要』第5号 常磐大学大学院人間科学研究科・被害者学研究科・コミュニティ振興学研究科 2011. 3
- ・『人間科学論究』第19号 常磐大学大学院人間科学研究科 2011. 3
- ・「新勤評反対訴訟団ニュース」第40号 新勤評反対訴訟団事務局 2011. 5
- ・『玉川大学教育博物館館報』第9号 玉川大学教育博物館 2011. 8
- ・『教育社会史史料研究』創刊号 教育社会史史料研究会 2011. 7
- ・『仏教教育ニュース』No. 38 日本仏教教育学会 2011. 8
- ・『武蔵大学人文学会雑誌』第43巻第1号 武蔵大学人文学会 2011. 7

* 抜き刷り

- ・竹下昌之「我が国『国民学校』の教科書研究Ⅰ」『子ども教育研究』第2号 抜刷 2010. 3
- ・竹下昌之「我が国『国民』学校の教科書研究Ⅱ」『子ども教育研究』第3号 抜刷 2011. 3

事務局からのお知らせ

1. 東日本大震災の影響について

3.11の東日本大震災の被災者のみなさまには心よりお見舞いを申し上げますとともに、一日も早い復興をお祈り申し上げます。教育史学会では3月に行う予定の第2回理事会を順延して6月4日に開催いたしました。また、学会として被災した歴史史料をまもるために「歴史資料ネット」に寄附をすることとし、会員のみなさまにもご協力を求めています。詳細はHPをご覧ください。

2. 会費納入のお願い

2011年9月より第55回大会年度がスタートしました。今年度会費及び過年度会費をお支払いいただいていない会員の方には、振込用紙を同封させていただきました。速やかな納入にご協力ください。

年会費は「ゆうちょ銀行」(郵便局口座)からの自動引き落としにより迅速確実に納入できます。会員の便宜と事務効率化のために極力ご協力ください。なお、自動引き落としを希望される方は事務局までお申し出ください。必要書類を送付させていただきます。

3. 会員登録について

現在、次の方々の居所が不明となっております。お心当たりの方がおいでしたら、事務局までご一報くださるようお願いください。なお、会員登録内容の変更は、ご本人からの申し出によってのみ変更が可能ですので、よろしくごお願いいたします。

木田竜太郎 姜華 板橋孝幸 諏訪佳代 豊田ひさき 常本勇治 吉川友能
金明淑 背戸博史 蛭田道春 鳥巢典

(順不同・敬称略)

4. ホームページの移転について

学会のホームページはこれまで国立情報学研究所「学協会情報発信サービス」の提供するサーバーに置かれてきましたが、そのサービスが停止されますので下記に移転いたしました。今後はこのURLからご利用ください。

<https://kyouikushigakkai.jp/index.shtml>

2011年10月
新谷 恭明